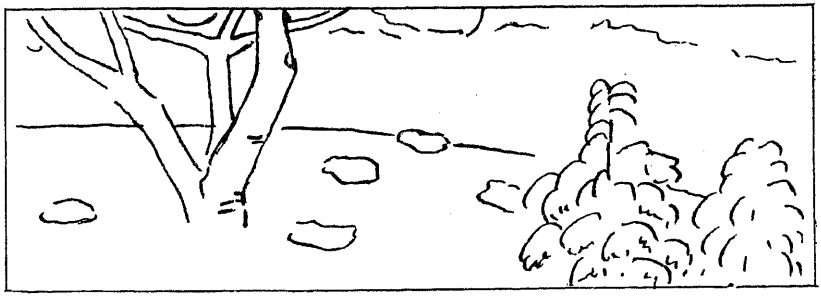


新園寄せがき帖（其の二）

及川ふみ

こゝ大塚の新園舍に引きうつゝてから早や一學期は夢のやうにすぎ去つた。その間、小學校への入學、新入園兒の募集に檢定に、保育實習科生の就職等々、こ次々こ學校行事が忙しくつゞいた。

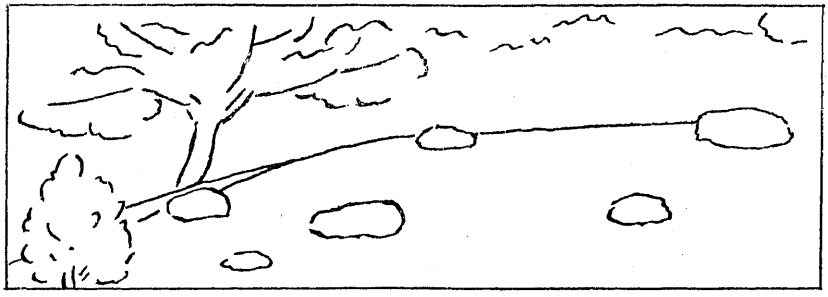
幼兒たちは新らしい奇麗な園舍には移つたものゝお庭は二三寸もの霜柱でぬかつてゐる上に、運動器具がまだ一つも備へられないので、數度の雪の日の外はほこんご一月二月は室內生活で終始してゐた。この學期からは上靴が二足、一足は上のごむが茶色でもつぱら室內用上靴、こあつたがこの庭靴はこれも新調の立派なニス塗の靴箱の中にしまつてあつた。

三月に入つてからはほか〳〵あたゝかい日もあつて本校の大きなグラウンドへいつて思ふ存分かけさせる事も出來た。

四月の新學期になつて砂場の周圍やテレスの下も美しいコンクリートの鋪裝工事が出來上つた。今度の冬は霜ごけのこきにも室外で充分遊ぶことが出來るし、机をもち出して日向ぼつこしながらお話やお仕事も出來るこ考へただけでも嬉しくなつた。

東京市役所の公園課の方のお指圖によつて庭の工事がすゝめられて來た（特に倉橋先生が井下公園課長に御依賴になつてその道の本職の方々の設計による）

植木屋が毎日八九人位づゝたち働いてゐる、大小一千數百本の樹が次から次へこ植えつけられる。六百坪にあまるこの庭に、もこから植はつてゐたのは大きな櫻が四本だけであつたのに、けやき、しい、つゝじ、ヒマラヤ杉なご南の塀に沿つて出來た細長い山に澤山に植えこまれた。その木々の間は一面に芝生がしきつめられた保育室から見える色はたゞ綠ばかりになるのも遠くはないこ思はれる。



職員室の小黑板に木の根の觀察と倉橋先生が大書されたのも此植ゑこみの最中だつた。

土筆

庭の手入や運動具の備へつけ工事のために幼兒が思ふまゝに幼稚園の庭で遊ぶことも出來ないので天氣さへよければ本校のグラウンドへかけつこに、摘草に、毎日の樣に本校へ進出する。今日もその道をたどつて變電所の横までゆくとすぎなの小さいのがちらほら見え出した。もしや土筆がと、あたりを見まわすと、あるは、あるは、ぬく〳〵と榮養豐かなのが澤山に生へてゐる。思はず、「皆さん土筆」とさけんだ。幼兒のよろこび方も一通りではない。みるみるうちに兩手に一ぱいの土筆をとつた。寄宿舍の坂の方から新らしく入つた川の組の人たちが散歩から歸つて來るのが見えた。早く早くと手まねいた。のこりの土筆を此人たちにゆづつてグラウンドの方へひきあげた。一人でどの位づゝこれたか數へさせたが多い人は五六十本、大抵の長さが三寸から四寸位もあつた。少い人でも三十幾本もとつてゐた。東京の中でこんなことは珍らしい事で新校舍二萬數千坪の敷地の廣さがありがたかつた。

土筆をあづかつてかけさせたいが紙も鉛筆ももちあはせがない。地面の上に木ぎれで名をかいて各自の土筆の所在をあきらかにして遊び出した。

お忙しい倉橋先生はこんな樂しみをされる暇もないのでとつてきた土筆にすぎなをうゑ添へて主事室へかざつた。これない人達にとつてやりやり自分がとつた土筆も數十本あつたので歸りにもつていつてゆでゝ翌日のお辨當に入れてきた。

次の日月子さんは朝からにこ〳〵顔で「けふは土筆のおかずよ」とお辨當を樂しみにしてゐる。「私もよ」と思はずいつた。月子さんのお母さまのお心づかひがうれしかつた。

庭の植えこみも一段落ついた。ブランコやスベリ臺などの運動具も備へつけられて幼兒の遊び道具もふえた。幼稚園のおひつこしも一家のひつこしも同じくらゞ幼兒にとつては迷惑なことであつた事でせう。